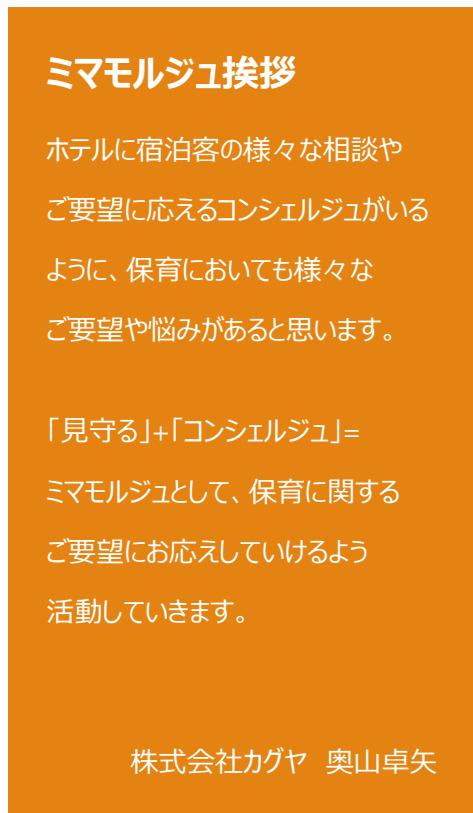


# 2018年度G Tセミナー G T関東見守る保育研修会in神奈川

第89号 2018年11月12日発行



## G T関東見守る保育研修会 in 神奈川大会

2018年10月27日にG T関東見守る保育研修会が横浜国立大学にて開催しました。

関東のG T園を中心に230名の先生方が集まり、G T神奈川会員の園見学や実践発表が行われました。

### 研修プログラム

9:00~11:00 園見学  
12:00~12:45 受付  
12:45~14:30 実践報告  
14:30~14:45 休憩  
14:45~17:15 講演  
～17:30 研修終了

**主催**：G T関東見守る保育研究会 神奈川事務局

**日時**：2018年10月27日（土）

**会場**：横浜国立大学（横浜市保土ヶ谷区常盤台79-1）  
教育学部8号館 101教室

**定員**：230名



※来年度のG T関東見守る保育研修会の主催はG T北関東です。  
東京の会場にて研修会を実施予定です。

---

## 基調講演 「新しい子ども観」

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

---

### —はじめに—

皆さんこんにちは。今、実践発表を聞いて一園ずつ、コメントしようと思ったが7園あると忘れてしまう。ただ、凄く大事な内容が入っていた。なので、全体的なことを話します。今、保育園が危険かなと思っている。それは、何かというと、世界中で話題になっているのが、0からの子ども同士の関わりが大事だと言われている。先ほどもあったが、小さいうちから社会に出るため色々な事を学んでいる。人類は、遺伝子を残すために産期が短いので、毎年産まないといけない。上の赤ちゃんが9ヶ月くらいになると、離乳をしないと妊娠が出来ない。妊娠をすることもあるが本来は、離乳をしないと次の子を妊娠しない。次の年に産めない。かつて人類は9ヶ月で離乳していた。誰か赤ちゃんを見ないといけないが、人間は家族・社会を作って共同保育をしていた。だんだん他者を認識する。9ヶ月革命と言われているが、他者認識をはじめ1歳になると、意図認識をすると言われている。膝からおろされる前に、6ヶ月くらいで村の人の顔を知ります。6ヶ月くらいまでは、お母さんの元にいますので安心し、お母さんも安心していると、赤ちゃんも安心したと思う。自分が信頼している人が、安心して見る人を自分も安心だと思える。6ヶ月くらいで村中の人々に抱かれていた。村の人が安心した人になる。他の部族の人は危険なことがあるので、人見知りを始める。それまでに村の顔を覚えたからと分かっている。アフリカにサン族がいるが、首に貝殻をしています。首飾りは抱っこすると貝をつけて、守りますという印で、貝が多いほど、将来皆に守られる。人見知りがはじまるとき赤ちゃんは、社会を学んで行くと言われている。お母さんは次の子を次の年に妊娠するのに対して、霊長類でチンパンジーは4歳までずっと抱っこしている。ゴリラは3歳、オラウータンは7歳。人間はそれに比べ早い。社会に出る時、必要なことなのに、子どもが少なくなってきて、9ヶ月過ぎても抱っこされるようになってしまった。0歳児クラスは、ほとんど9ヶ月を超えていると思う。抱っこしている先生もいると思うが、危険な事。霊長類研究の山極さんは、最近、人間が猿化していると言っている。人類は早いうちからお母さんの膝に降ろし、お母さんが膝から降ろした子を保育園は預かる。そうすると園は、お母さんの代わりをしようと、そのまま抱っこしてしまう。赤ちゃん1人に1人の先生が付くが、多くの大学の先生が主張する担当性。子どもは安心するだろうと考えます。それが進むと、もっと安定するのはお母さんに返すことではないかという事で、3歳児神話が広がり、お母さんの元で育てた方がいいだろうと国が進めているのが、3歳まで育休を取らせようと広がっている。3歳まで家庭で育てられると、人類は危険だと思っている。共同の中で知恵がつきます。何で話したかというと、総括的に実践発表のほとんどが、子ども同士のことが映っていた。赤ちゃんが何かとろうとしたが、それは1人でもできるが、「○○ちゃんが関わった」と言った。その赤ちゃんの発達に刺激を与えるのは園だけ。家の代わりをするのではなくて、昔の人類の集団を持っているのは私たち。他の発表もそうだが、子ども同士の関わりの中で、どう発達していくのかを実践発表して欲しい。例えば、ある園の実践発表を見ると関わる発達ではない。1人の子が、どう発達したかの研究だが、1人の子だけでなく、子ども同士がどう影響していくかは私たちからしか提案できない。神奈川でも、東京でも、保育園に入れないと言って話題になった。最近、少しずつ、わざと落ちるようにする親が増えてきました。園に入れないと、育休が伸び、2歳まで家で育てるようになり、3歳までの保育はどこの園も空だらけになってしまふ。そうすると、園は存続できないし、赤ちゃんにもよくない。母親も一人で育てるようにはなっていないので、これまでよりノイローゼや虐待が増えると思います。それは、今日見せて頂いた実践発表が、子ども同士の発表が多くありいいなと思った。

これを保護者に、子どもがいっぱいいるからこそ、こんな発達をしたと伝えて欲しい。保育園を守りたいという訳ではなくて、元々人類はそういう生き物です。有名なのが、鳥の研究所の人が、集団で生活するインコがいるが、人間が育てて野に放った。野に放ったらみんな死んでしまった。集団で生きていたものを、個で放しても生きていけない。もともと人間も、集団で生きるので、人間も個で育てていたら、危険だと思います。それを目の前で見ているので、そういう提案をしてほしい。エピソード記録も、エピソードについて考えるのもいいけれど、子ども同士や環境が配慮されづらい。実際は、子ども同士がどう関わったか、助け合ったか、刺激し合っているかが大事。新しい保育の提案の中で、研究によることから、どうしてこういう提案をしているかを、難しいかもしれないが研究の根拠を話していきたい。

## —『人類誕生』から考える「保育」—

まず新しい知見によって導かれるものは、新しい方法論を提案することではなく、人類が長い間、培ってきた命を繋ぐ営みの中で、最も大切な育児という行為を、新しい研究によって裏付ける。特に今後、人口減少社会において、育児方法は人類が辿ってきた。何度も訪れた人口減少に対して、それを乗り切ってきた育児法を見直すことです。それが今年最初やっていたNHKの『人類誕生』。ビヨークランドらは、彼らの考察から、発達心理学における幅広いトピックからのデータを提示し、減少には多様性があるものの、共通生成を見出したと確信しているそうです。この共通性と関連しているのが、進化の原則に基づく発達的な視点だということです。アフリカから出た子孫であること。そこから見れば、共通なものが見えるだろうという事。昨日たまたまTVを観ていたら、ジャレド・ダイヤモンドが講演をしていた。進化から考えようという人だが、人類が誕生し、様々な人族の中で、なぜ私たちの先祖ホモサピエンスが生き残ってきたのか？そして、どのようにして今まで遺伝子を繋いできたのか？何が、子どもたちの遺伝子に受け継がれてきたのか。『人類誕生』に出ていることだが、好奇心。海の食べ物を食べてみようという好奇心が、人類が生き延びた1つ。赤ちゃんは強い好奇心が受け継がれている。先ほどの発表の中にも好奇心が出ていた。次に効果的なのは、一夫多妻の方が子どもが生まれると思うが、一夫一妻の方が生き延びている可能性が高い。育児は協力しないとできない。女性だけで子育てる場合は、社会が支えないときつい。それから、ネアンデルタール人とホモサピエンスとでは、ネアンデルタール人の方が優れていたが全滅した。どこが違ったか。私たちホモサピエンスは、力が弱く、頭もよくないから、集団を作っていた。この集団規模の大きさで生き残った。集団規模が小さい方が滅びるというのは、人口減少社会は滅びる方向です。『人類誕生』では、集団規模は違って集団規模が大きいと皆で協力した。智慧を出し合い助け合う。力を合わせる遺伝子を赤ちゃんは持っています。『人類誕生』は3週行っていたが日本にどう渡ってきたか。日本に来ようとするときには困難さがある。上からだとシベリアの極寒、下は海を渡らないといけない。ホモサピエンスの中で最もチームワークがよかったと言われ、これは日本人の特徴だと思っている。世界で最もチームワークがいい遺伝子を私たちは受け継いでいることが進化から分かります。ジャレド・ダイヤモンドは、保育育児の仕方で、ヨーロッパは個人主義的ですし、競争をして自立をしていくが、そろそろ見直した方がいい。伝統的育児を見直した方がいいと提案している、『昨日までの世界』という本の中に書かれている。その一つ目が、乳児に複数の成人とスキンシップさせる。進化の最初に起きたことで、どこからか一人の人が安心すると言っているが、人類はもともと違う。日本では添い寝をするが、ヨーロッパでは一緒に寝ません。大人と寝るとベットが沈んで、ふんずけてしまうと言われる。乳児を抱きかかえ、正面を向かせるとと言われ、ヨーロッパの抱っこ紐は、外向きに抱っこしています。外を見た方が好奇、心が満たされ、日本ではおんぶされる。背中からやらることが見え、赤ちゃんは見られることが好きではない。子どもに自由に探索させることも注目され、自由に探索するほど、危険回避能

力が高いと言われています。異年齢の子どもと遊ばせる。出来合いの教育玩具やテレビゲーム、その他の娯楽ではなく、自分たちで楽しむ方法を学ぶようにしてやる。

## —日経新聞の記事—

よくG Tで見せるが、日経新聞の記事。このタイトルは私たちがやるべきことが示されている。今一番影響しているのがO E C D。経済学者がこれからの経済は、保育を見直さないとえらいことになると言っている。保育の専門家の情緒論でなかなか進みません。日経新聞で「保育所」ときたら、「女性の社会進出」「就労支援のため」「育児と仕事の両立」「女性が働くための場所」と記事が続くのが保育所の特徴。下の「幼児教育の場に」ときたら、上文は「幼稚園」となる。これは相反している。これは「保育所」という意味は何でこう書いているかというと、「0から教育をする場所」だからという事です。それに対して世界各国、質への注目が高まっている。その教育の質によって、よくなったり悪くなったりする。その元が、日経新聞に出ていたグラフだが訳した方に問題がある。これを読むと誤解します。人々、エモーショナルコントロールは、自分の力をコントロールすることは、下の子が生まれたときに、上の子が我慢することで、お母さんの元では育たない。社交性なども誤解を受けるが、本を見ると、O E C Dの資料です。ここに書かれているのは、生まれたのと同時に発達して、量を拡大し受け入れる体制を整備することが大事。これが指針の改定会議に出されたが、3歳以上に増えないものがあるが、実際には出さない。なぜなら、3歳まで育休を取らせようとしているので、早く集団に出した方がいいとなるので、出していない。元のグラフを見たいと思います。これを観ると分かるが、3歳以上で大きくならないのはこれだけあり、1つがエモーショナルコントロール。聴く力は、2歳位までに色々な人の言葉を聞きなさいという事。ビジョンは先を見通す力、日常的な反応の仕方。この時期にしか育たない。子ども同士でしか脳が大きくならない。子ども同士を触れさせないといけない。しかし今、3歳まで育休を取らせようとしているが、そうすると脳の部分が大きくならない。ナンバーとピアソーシャルスキル。シンボルは象徴機能の事。なぜ、乳幼児期の発達は大切なのか？それは、「その後の人生のチャンスや健康に決定的な影響を与える理由として、乳幼児期における脳と生物学的な発達は重要な一里塚であり、非常に感度が高い時期だからです。小学校に入るまでにその子どもの人生の成功の基はそれ以前に出来上がっているのではないかという研究です。」具体的に言うと視覚は、脳の深い部分と結びつきがあり、多くの人間の顔を見ることによって、神経生物学的な側面能力を高め、人の気持ちを読み解く事が出来る。特定の人だけでは、脳は大きくならない。精神的な暴力を受けた子は、脳内に違った形の繋がりが出来るが、その後の人生で役に立たない。逃れるために自己防衛をするが人生では役に立たない。乳幼児期の言語理解力や表現力は、3本柱で言っているが、小さいうちにランゲージ、応答的な言語環境で育つと、将来表現力が高まり、先生の説明を聞き、理解する準備が出来ている。小学校へ行くとき、きちんと聞けるようになる。小さいうちに黙って言うことを聞かせていると、大人になってしゃべってしまう。

## 感情コントロール

言語環境が好ましくなかった子どもは、10語、15語程度の単語を読み解くのにも苦労し、小さいころの言語環境が乏しいと大人になって苦手になってしまう。社会的な葛藤の中で、暴力的な行為していた子どもも、小学校へ入学すると、その暴力的な行為を減らし排除し、口頭コミュニケーションを持って解決することが困難。

## マイケル氏とキャロル氏の主張

生後、たったの1年である能力が出現するという事実は、1年間が大事。2歳から子ども同士が関わるから、そこからいいのではなく、それまでに経験したことが出現する。20.30.40代になるとどうかの研究。パッと目につくのが

オールドエイジはメモリーロスと書かれている。乳幼児期に受けた教育が、決して修辞的な意味ではなく、その後の人生においても影響を与え続けることを意味しています。我々は、子どもたちが生まれた時からその子どもたちの人生を追い、そこで分かったことは、良い乳幼児教育を受けていない子どもたちは、20代になる頃には、中では学校を落第したり、10代で妊娠したり、早い時期に罪を犯す可能性が高いということです。30代から40代では、肥満、高血圧、うつ等の精神病を患うリスクが高まります。50代から60代では、安静的な心臓疾患、糖尿病、その他の慢性的な病気を引き起こす可能性が高まります。そして、その後の配布ステージでは、早期老化、認知症をもたらします。要するに、乳幼児期の経験は、その後の人生の経験、ウェルビーイング、効果的学習、行動修正・習慣に大きな影響を及ぼすのです。1年生の成績がいいためではなく、人生そのものになっている。

## 9ヶ月革命トマセロ

赤ちゃん9ヶ月を過ぎる頃から、他者を意図を持った存在として認識し、他者との三項関係を築くことによって、人間が培ってきた文化の中に参入し、その文化の中で学習することとともに、文化の担い手になるのです。人間らしさは他者認識をすることで人間らしくなってくる。

## 遊びの目的

経験の中で最も重要と言われているのが、子どもの遊び。目的がないことが遊びだが、機能が無数にある。動物も遊びをする。社会を学ぶことも入っているし、大人になって機能が発揮されるものもある。人は未成熟期が長いというのは、ある意味で、遊びが長期間に及ぶことであり、遊ぶのが重要だから、子ども期を長くしているのではないかと言われている。大切な遊びの多くは、現在の環境の中では必ずしも奨励されていない。

## 探索の意味

乳幼児は環境を利用して遊ぶよりも、環境を探索することに多くの時間を割きます。探索は遊びの一種類と言われていたが、探索が多いほど、遊びが豊かになるとと言われている。ハイハイが始まると、あちこち行きたがる。探索活動という事で大事な事。当然、目は届かないといけないが自由に探索することを保障する。

## 探索活動の特徴

9ヶ月間は探索が行動の大部分を占めます。12ヶ月までに遊びと探索が同時に起こるようになり、18ヶ月までに、子どもは探索よりも、遊びを通して環境との相互作用を行うようになります。乳児期後期と幼児期初期に、男児は女児よりも探索を行うことが多い。

## 人との関わりの中で発達する

社会の中で生きていくために、1歳の頃になると様々な社会的発達が現れる。

1. 人を助ける
2. 人に教える
3. 人と分け合う
4. 道徳規範を守るとする

両手に持っていたら赤ちゃんはドアを開けてくれると言います。物を落として、取ろうとして取れないと拾ってくれるような力が遺伝子である。人に教え教えたがる。指差しはチンパンジーもするが、自分の利益がある時にしかしない。人間はここにあると教えてくれる。これはうちの園で実験をしてもそう。お手伝い保育で教えに行くのでは無く

て、教わりに行こうとすることもある。人と分け合う。1歳位になると人の口にものを入れようとする。大人がある遊び方をして違う人が別の遊び方をすると怒った顔をする。

### ○と△の実験

有名なのが丸い形のものが坂を上ろうし、四角がそれを助け、三角が邪魔する。そうすると赤ちゃんに四角と三角をどっちを取るかと言うと、助けた四角の方を選ぶ。赤ちゃんは生きるためにどちらを観方にした方がいいということがわかっているのだと思う。赤ちゃんから持っている。これを上手に引き出していかないといけない。1歳でも割り込みをすると怒る赤ちゃんがいる。その頃から正義感に燃える子がいる。育てられ方もあると言われている。

### 誤信念理論

誤信念というやや高度な心の状態の理解であっても、注視といった乳児の「自発的な反応」を指標に使うことで、従来の定説であった4~5歳をはるかに下回る年齢で理解している様子を示す知見が様々なかたちで報告されている。

### 心の理論

ヒトや類人猿などが、他者の心の状態、目的、意図、知識、信念、志向、疑念、推測などを推測する心の機能のことである。

### ファンタジー遊び

これらの遊びは幼児期の遊びの典型です、ファンタジーには行為や物や仲間をあたかも別の者やことであるかのように見立てることが含まれます。園では、ごっこゾーンとして、その役割が演じられるようなものを用意します。自己と他者関係、ものと役割の交換などがあると言われています。木を箸にして、葉っぱをお皿にして、木の実をご飯に見立て食べる真似をする。早い時期に出来る。人形にご飯を与え、遊びを展開させる。家で行われているようなお母さんの真似をすると、社会の真似をすると、だんだん広い世界を体験させる環境が大事。70年代後半になって乳幼児期の行動発達研究が急速に進み、赤ちゃん革命が起きます。90年代から研究が進み、赤ちゃんは白紙で生まれる的な発達観は本格的に否定をされたのです。

### 感情コントロール

感情コントロールには、心の理論と実行機能が必要である。それが次第に幼いうちから備わっていくということがわかってきていている。

### 気をそらす

ホットな情動をクールにする方法として、気をそらすことが中心に考えられている。他から気をそらすことを働きかけられてクールにするところから、自ら気をそらす力を獲得していく。→それは、0歳時頃から行われていく。

### 20世紀に行われた研究

「赤ちゃんは、外から受けた刺激や学習によって成熟する」「刺激→反応」という構図をベースに成り立っていると解釈してきた。赤ちゃんに刺激を与えると、赤ちゃん反応を示し、学習する。「赤ちゃん白紙のキャンバスだ。刺激を与えればどんどん吸収する」

## **原始反射（新生児における、脊髄や延髄レベルの機能）**

その機能によって行動している脊椎動物である

↓

神経系の成熟と子どもの行動は1対1で対応している。やがて大脳皮質の機能によって原始反射が抑制され、消失するようになると、中脳の成熟と関係している「立ち直り反射」といわれる運動が出始める。お座りや寝返りが出来るようになるのは、そうした大脳皮質にまで及ぶと、つかまり立ちや独り歩きなどの行動ができるようになる。

### **ピアジェの主張**

赤ちゃんにおける原始反射を用いて、周囲とのやり取りを繰り返すことによって、次第に自分の意思で動かす運動である随意運動が発現する。

### **赤ちゃんにおける行動学**

プレヒルによる提案「赤ちゃんは勝手に動いている。そしてそれを“見る”ことが理解につながる」という信念のもと、行動学を赤ちゃんの研究に導入し、赤ちゃんを延々と観察することを重視した。

### **最近の原始反射の考え方**

環境が行動を変え、それによって脳そのものも変化し、それによってまた行動が変わり、環境もまた変わるという相互的な自己組織化のシステムである。

### **自発運動**

観察の結果：身体に触れられるなどの刺激を与えられなくても自然に起こる「自発運動」を行っている。（今まで赤ちゃんの運動と言えば原始反射であると思われていたのですが、そうではなく自発的な運動が主であり、原始反射はそれに含まれているだけであるということ）

### **ピアジェからプレヒルへ**

ピアジェの主張：赤ちゃんにおける原始反射を用いて、周囲とのやり取りを繰り返すことによって、次第に自分の意思で動かす運動である。

### **育児・保育への影響**

かつての保育の考え方：赤ちゃんは外から刺激によって初めて動くのだということは、赤ちゃんを育てるには外からの関わりがなければならない。

自発的運動説：赤ちゃんは自ら動き、自ら育つのである。（赤ちゃん自ら動くことによって、他者や周囲の環境を認知する）

### **20世紀後半に発見された神経科学的な2つの重要な所見**

「神経細胞の自然な細胞死」と「シナプスの形成と刈り込み」その所見をもとに、ダーウィニズムが、「遺伝子によって作られた粗い神経組織が、二つの段階を経て無駄を削りつつ成長する」ということを提唱した。

### **2つの段階の提唱**

第1段階：遺伝子によって作られた粗い神経系組織が、遺伝子によって神経細胞の細胞死は決まる。

第2段階：シナプスの刈り込は、学習と言う過程によってより頻繁に使う回路は残され、そうでない回路は淘汰される。

## 学習とは

常に選択と言う過程があり、どちらを選んで消したり、逆にさらに強く強化する過程が発達そのものである。そのことは、あくまでも自発的な行動でなければならないということ、自分の意思によって行われる活動こそが学習であるということ。

## 早期教育肯定派の人

シナプスの数が最大になる乳幼児期に、子どもの能力を伸ばすために多くの刺激を与えることが豊かな育児環境である。

## 早期教育の専門家の懸念

刺激が強すぎることによって、本来バランスよく行われるはずのシナプスの刈り込みに支障をきたし、子どもの脳に悪い結果をもたらすのではないかという懸念が、専門家の間で広がっている。

## 赤ちゃんは無力ではない

赤ちゃん学のもっとも大きな成果は、まったく無力であると思われていた胎児期から新生児期（生後一ヶ月まで）、乳児期（生後1年まで）の赤ちゃんにきわめて優れた能力があることを発見した。

大人になるに従って優れてきます。赤ちゃんが大人の未成熟な人と言われ、教えないといけないと言われ、自分でやれないので生きていけない。大人にやってもらわないと死んでしまう。最近の研究では、赤ちゃんは出来ると言われている。大人に赤ちゃんが仕掛けていると言われています。赤ちゃんのことをあやしているが、最近の研究で、赤ちゃんが先に笑いかけている。赤ちゃんは泣いて大人はやってあげるが、緊急を要する時は、人間は呼吸困難になると危ない。呼吸困難になったような泣き方をするが、大人に早くやって欲しいこと。最近、赤ちゃんの泣きは、偽装泣きと言われている。そういう能力は、大人を上回ってあると言われている。出来るのが大人だとしたら、大人より成熟したのはロボット。大人より成熟した人は、ロボットになってしまふ。赤ちゃんは、出来るようになった大人を使いこなしている。ロボットが開発されたとき、ロボットは人間が出来ないことを補うと言われていた。最近はそうじやなくなりかけている。労働力がなくなると、ロボットが変われるよう、人間と同じ事が出来るよう研究され始めている。そうすると人間はいらなくなる。『哲学する赤ちゃん』を書いた人がいるが、最後に、「私たちはもう一度赤ちゃんから学ぶべきだ」と書かれている。赤ちゃんは何も知らないから面倒見るというのは間違っている。

## 未熟

赤ちゃんは未熟で、次第に成熟した大人になっていくという考え方が修正され始めています。特に、「社会脳」とか「心の理論」と呼ばれている分野では、赤ちゃんのころはなくて、次第にそのような力がついてくるという考え方には、見直され始めています。

## 天地が逆転するような説への変換

ピアジェ派：

「赤ん坊は模倣学習する」という説 ⇒ 「赤ん坊は模倣によって学習する」 ⇒ 「模倣相手は乳児のころから必要である」

人間を実験に使えないで、自分の子どもを実験に使った。それは9ヶ月の息子と10ヶ月のチンパンジーを育てた。そうすると、同じように発達していく。少し人間よりチンパンジーが早い。人間の息子は、人間しかできないことをやった。それは真似をすることをした。息子がチンパンジーのまねを始めたそう。チンパンジーのような話し方をして、食べ方をしてサル化していったので、引き離した。息子は知能が遅れていたのではと言われたが、その後、ハーバード大学に行ったので頭は悪くない。模倣は人間の特徴と言われている。

## 今では主流である重要な考え方

人間は、「言葉を話す生き物である」というよりも、「真似をする生き物である」「人間を他のあらゆる動物と根本的に区別するものは、しばしばその栄誉を冠されがちな言語ではなく、模倣する能力である」(スザン・ブラックモア)

## 母子観

長い間、胎児と母との関係は、「2の体、1つの心」と言われてきた。

→「原始歩行」「新生児模倣」「生理的微笑」それは、生まれたときに親に愛情を喚起するための方法を、準備している証拠ではないかと言われている。

## 味覚

新生児は甘い、苦い、酸っぱい味を区別することができ、味に合わせて大人と同じような表情をするとも言われている。こうしたさまざまな表情の多くは、胎児期にすでに準備されているという。

## 睡眠

レム睡眠とノンレム睡眠が胎児期にすでにある。視聴覚、味覚あるいは触覚が胎児期にすでに機能していることはもはや常識となっており、胎児が、顔の弁別や母親の声を学習していることなどもわかりつつある。

## 最近解明ってきたその他の赤ちゃんの特性

「赤ちゃんは自己中心的で、両親や環境から社会性や道徳を学んでいく」

↓

私たちの天性の資質に「道徳観」「共感と思いやり」がある。

## 自己中心性

1651年、トマス・ホッブズは、「自然の状態の」人間は、よこしまで自己中心的だと主張した。→赤ちゃんの頃から「公平感」という「資源の平等な分配を好む性向」や、「よい行動が報われ、悪い行動が罰されるのを見たいという欲望」である「正義感」があると言われている。

## **つられ泣き（共感）**

誕生してわずか数日でも、赤ちゃんは泣き声を不快に感じることがわかっている。そのために泣き声に反応して自分の泣き出す傾向。

## **集団による刺激**

見て真似して関わって教わって教えて一緒にやって刺激の大きさ

同年齢く異年齢

区別く統合

## **アタッチメントの基本原則**

最近、むしろこの敏感性よりも「情緒的利用可能性」という考え方

## **情緒的利用可能性**

特に必要とされないときは子どもの活動にあえて踏み込まない。専門的な言葉で言えば「侵害的でないこと」が重要。この考え方は、もともと養育者個人の特性としてではなくて、養育者と子どもの関係の特質として提唱されている。つまり、様々な違いを持った子どもに対して、養育者が適宜、それに合わせた関係を築けるかどうかという事を強調するもの。

## **適切な養育者の行動**

子どもの方が養育者を自分との相互作用に頻繁にまき込もうとする状況では、それに積極的に応じてあげるという事が養育者の行動としては適切である。

## **養育者の望ましい関わり**

それは子ども主体とした概念であり、子どもが求めて来た時に、確実に応じられるという事を養育者として望ましい関わり方として仮定している。

## **二者関係敏感性**

保育者が母子関係に置けるような、二者関係的な敏感性を備えていることと、その保育者と子どものアタッチの安定性が高くなることとの相関は、子どもの数が少ない時には

## **最近の愛着の考え方**

私たちはつい、何か特別なことを出来るだけたくさんしてあげることが子どもに対する豊かな愛情のように思いがち最近O E C Dも含めてプロセスの質、関わりの質のことが言われている。保育者と子どもの関係、子ども同士、園と保護者、園と地域における質がある。イギリスの研究で、保育者の子どもたちへの関わりが温かく、応答的である事。子どもに聞かれたら共に考え、深め続ける姿が発表されたが、誘導していくことでもなく、質が高いと言われている。子ども主導の遊びや活動、子どもが中心で教師が繋ぎ、発展させる遊びや活動が多いという特徴です。今回の指針では温かく応答的と言う言葉が入った。

## 保育の質研究

保育者はいつも元気で明るく子どもに接していますか。

保育者はいつも子どもの手助けを親切にしているか。

保育者はいつも子どもにしばしば微笑みかけているか。

## 人との関わりの中で発達する

社会の中で生きていくために、1歳の頃になると様々な社会的発達が現れる。

1. 人を助ける
2. 人に教える
3. 人と分け合う
4. 道徳規範を守るとする

私の考える関わりの質は、子ども同士は、異年齢の在り方は模倣する良さ、助けある援助。多様性は5歳だから何かできるではなくて、その子が何ができるか。社会の形成者として、色々な年齢で構成されているので、小さいうちから経験する。乳児からの関わり。もう1つ新たに新しい提案は、保育者と子どもの関わり方です。環境を通して発達を助長する。それは自発的・主体的な環境をどう作るか。どんな体験をさせていくかは、乳幼児教育の原則です。かつては白紙論でした。1965年作成の保育所指針の保育内容を示す6領域は、小学校の教科に代わるものとして作られ、一定の知識を教えるような行き過ぎた系統主義が横行することを招いてしまった。それはまた、当時、受験戦争が激化する中で、井深氏における「3歳では遅すぎる」を代表として、早期教育の波がおき、保育へもそれが反映された。歪んだ指導を是正しようと、幼稚園教育要領1983年改訂。それに準じて、翌90年において指針の改定に当たって、児童中心主義へと変えていこうという動きがあった。「指導を控えるべき」というメッセージと受け取った保育者の間に混乱が広がり、行き過ぎた指導の抑圧の危険性をはらんでいったように、環境を通した援助は、放任の危険性をはらんでいた。「子どもたちは何をしてもいい」「1日中好きなことをしていればいい」と保育の専門性に対する混乱が生じてしまった。私が提案したのはそうではない。

## 指導的援助から応答的援助（見守る）へ

赤ちゃんは能動的に学ぶ学習であるゆえに「応答性」という関わりが重要になるのである。援助する際に気を付けないといけないのは、先回りをして援助することは慎重にならないといけない。また、大人が大人の価値観における狙いをもって援助することにも慎重であることが必要になる。私はこのような援助を「指導的援助」とし、望ましい援助の関わりは「応答的援助」という関わりをするべきだと思っている。うちの園の若い先生が意識してか分からないが、感心したことがある。1歳の先生が、リーダーの日にある子が泣いていた。その子に向かって、「やって欲しいなら、ちゃんと言いなさい」と言った。泣いている子が、もっと大きな声で泣いた。そしたら「ちゃんと自分で言えたね」と言って、やってあげていた。それが言葉が出るようになったら、言葉で言うようになる。言語的なコミュニケーションが取れない頃、察してすることではない。示したら連れて行く。

今現在、コンビニの前にカメラがあって、人を撮って、その人の仕草で万引きするかが分かるそう。そうではなくて、自分の口で言うことが大事。先生は察してあげることではなくて、自分で言えるようにすること。子どもは必要な時は言い、自分でやれるときは言わない。タオルしまう映像もあるが、エプロンをしまう時に、やってと言われたらすぐにしてしまう。仕舞い方を教えて、仕舞う方がいいと思っていたが、最近はすぐやってあげた方がいいと思

っている。依存する子どもは、言わないのでやってしまったら依存する。思いやって、しまったらだめ。言われたらやる。わからなかったら、子どもにやって欲しいか聞く。

子ども研究で示されていることにおける保育の在り方です。私が提案する保育のやり方、「見守る」になるが、皆さん、小さいうちから子ども集団が大事です。親が出来ないのは、子ども同士におけることは園だからこそできる。これが赤ちゃんから必要で、子どもにとって保育園に出すことが大事。ただ長い時間はちょっとかわいそう。それでも集団にだした方がいいと思っています。

本稿は、2018年10月27日に行われたG T関東大会の講演内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿3-2-11 新宿三井ビルディング2号館10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、  
QRコードからお願いします。